

出所者による授業を通じた学生の出所者観変化について

—A 大学社会福祉学科学生が提出した授業感想文をもとに—

発表者：齋藤史彦（青森県立保健大学）

キーワード：出所者・イメージの変化・出所者支援の視点

1. 背景

報告者が担当する「司法福祉論」の受講学生の中に出所者支援に抵抗感のある学生が毎年みられる。この要因はステレオタイプな出所者観や罪を犯した背景の理解不足にあると考えたことから出所者本人による授業を企画・実施した。

2. 目的

本報告では当該授業により、①学生の出所者観の変化の有無、②変化した場合にはその理由を探る事を目的とした。

3. 方法

授業は令和5年度にA大学の社会福祉学科3年生49名を対象に司法福祉論I（前期必修科目：全15回）の最終回に実施した（学生に事前に周知済み）。協力を得た出所者B氏による授業内容は①自身の養育環境（こども期の逆境体験等）、②犯行時の状況や心情、③体験した刑務所内の処遇の問題点、④出口支援に関する課題等で講義時間は約90分であった。受講後、学生から提出された1200字程度の感想文から出所者のイメージの変化とその理由に関する記述等をピックアップした。なお本報告にあたり、出所者B氏及び学生の個人情報伏せることによって、個人が特定されないよう配慮した。

4. 結果

講師の話すこども期の逆境体験や犯行の理由やその時の気持ちを理解することにより、出所者のネガティブなイメージを変化させた学生が少数みられた。また、犯行の背後にある劣悪な養育環境を問題視し、その改善・早期介入が指摘されていた。さらに社会生活につながる刑務所処遇の必要性など幼少期から出所後までの環境上の課題の指摘が多く見られた。

5. 考察

今回の授業で学生は出所者本人が語る自らの体験や感情を通じて、擬似的に犯罪の背景や犯行時の心理を知る機会を得ている。このことが学生のステレオタイプ的な出所者観が変化に影響したものと考えられる。いわば病理モデル的な見方が環境モデル的な見方に変化したものと捉えられ、当事者による授業は出所者観の変化に一定の効果があると考えられる。